

## 目録管理と OPAC

2012.8.20

松山 巖（玉川大学）

### ◆課題

ある特定の公立図書館を選び、その Web OPAC システムについて、検索機能、表示機能、ヘルプ機能等の現状報告を行い、評価を加え、改善点を述べてください。

### ◆詳細事項から一部分まとめてみた

#### (3) OPAC システムの基本的情報

現行システムの稼働開始時期： 2007～2011 が多い。1997 年（？）が 1 件、不明 3 件。

パッケージソフトのメーカー：

富士通系 7 (iLisWing21 系×4, iLisWave, SCHOOL-ILIS, 不明 1 館。なお大阪市は 4 名だが 1 館とカウント)

NEC4 (Lics LIVRE×2, Lics RE, Lics web2)

京セラ丸善 2 (ELCIELO)

まちづくり三鷹 1 (Ruby 図書館情報システム)

日立 1 (NEW LOOKS)

ブレインテック 1 (情報館 V7)

高度情報システム 1 (BLABO)

IBM1 (CILS400)

三菱 1 (MELIL/CS)

サンデータセンター1 (CLIS/400)

#### (5) 文字処理の詳細：「再現率と精度のトレードオフ」にかかわる。

再現率を上げれば（＝漏れを少なくすれば）精度は下がる（＝ノイズも増える）

精度を上げれば（＝ノイズを減らせば）再現率も下がる（＝漏れも増える）

**形態素解析：** 公共はしていないところが多い。→たぶん  $n$ -グラム方式

「ウキヨエ」で「世界のマーチ」の CD が、「とんち」から『かもめ評釈』がヒットしたりする

大学はしているところが多い

国会は今でも読みデータは分かち書きしているが…

NACSIS webcat で読み検索 ホウソウダイガク→0 件, ホウソウ ダイガク→853 件

ちなみに weecat plus では ホウソウダイガク→499件, ホウソウ ダイガク→1122件

### “読みの規格化”

**濁点・半濁点**は同一視するところと区別するところがあるが、利用者としては区別して検索したい場合が多いのではないか。少なくとも省いて入力しているのを見たことがない。

**促音・拗音**は直音と同一視が多い。

**長音記号**は無視して検索が多い。

これらの同一視によって、外来語や外国の固有名詞の場合はある程度表記の揺れを吸収できるというメリットもあるが、近頃の検索対象資料数の急増と相まって、和語・漢語の場合はいたずらにノイズを多くするばかりと言えないか。

同一視する場合、「山田純平」に対して「ヤマタシユンヘイ」という文字列をどのレベルで与えるか

書誌情報の一要素である「ヨミ」として与えるか

ヨミはあくまでヤマダジュンペイとしておき、索引レベルで生成するか

お墓の本を探そうと思ったら、馬鹿の本まで出てくるのは嬉しいだろうか。

どこかの館内 OPAC で、タッチパネル式端末に五十音表が出て来て、濁音・半濁音・拗音・促音の入力には表を切り替えないといけない。そこまで苦労して入力させておきながら、検索結果では同一視というのは、利用者を馬鹿にしていないか。せめて、濁音・半濁音なしで入力しても検索してくれる、ぐらいの注意書きが欲しい。

### カタカナ表記法特有の規定の扱い（ヂ・ヅ、助詞のハ・ヘ・ヲなど）

NCR のカタカナ表記法は、本来、カードや冊子体上の書誌記述等を排列するための規則である。

かつて歴史的仮名遣いが一般に用いられていたころ、正しい仮名遣い（特に字音仮名遣い）で辞書や索引を引くのは（今の人よりは慣れていたとはいえ）案外難しかったと思われる。戦前のレファレンスツールを利用する際などに実感する方も多かろう。そのような背景で、標目に字音仮名遣いが採用されたのは理解できる。

ところが、1946年に現代仮名づかい（1986年に改正されて現代仮名遣い）が制定されて70年近く経過し、人々の間に広く浸透している今日、NCRの仮名遣いとの違いは、いわゆる4つ仮名（ジ・ヂ・ズ・ヅ）と助詞のハ・エ・ヲだけといってよい。このような一般の人にとって違和感のある仮名遣いをツズケル必要があるのか、議論すべきではなからうか。

とりあえず現行での対応。ヂヅヲが入力されたら、自動的にジズオに変換する（名にもしないシステムもあるがあまりにも不親切）。問題は助詞のハ・ヘである。

検索の際、助詞に限定した扱いは難しいだろう。だからといって「へび」で入れたら「美しきエビとカニの世界」までヒットする（江東区、新宿区など）のはどうか。

ちなみに国会。タイトル=イソヅリ 0 件，イソズリ 96 件。徹底している。

そもそも読み検索ってそんなに必要か？という議論も…

例 1：村岡さん報告（配付資料 p.67）

例 2：一昨年の渡邊先生

- ・「ヨミ検索」の位置づけは、今後再検討が必要かも
- もともと、カード目録・冊子目録の「排列」のために「標目はヨミ形で」
- OPAC でももちろん一定の意味
- 漢字かな混じりの入力は大変
- 再現率の向上（表記形は文字種や字体などにゆれ）
- しかし現在では
- コンピュータリテラシーの向上（ワープロ入力は自然なこと）
- 再現率の低下？（ヨミの付与されていない項目も検索対象となる場合）
- 利用者をどう誘導すべきか？

曖昧検索／厳密検索が選べるか…まだこれから。

異体字の処理…辞書に依存，まだのところが多い

国会や大学に比べると，多文化サービスの立ちおくれが目立つ。特に非欧米系言語。

#### **(8) 館内 OPAC との比較。具体的には，**

③ユーザインタフェース：

画面（テキスト／グラフィカル） さすがに（利用者用で）テキスト画面はないのでは。

入力方法（キーボード／タッチパネル／マウスなど）

漢字変換の有無…タッチパネルでも漢字変換ができるところが増えてきたが，まだのところも。

せっかくこども画面があっても，同じ用語をひらがな表示にただけとか，検索結果は大人用と同じとか。（読みを入力しているのだからせめて活用したい）

⑤印字できるか

詳細画面から全て印字可能；予約したいときに限り印字してカウンターに持って行く；  
いっさい印字不可能

⑥設置箇所によって設定が異なるか

児童コーナーではデフォルトがこどもモードとか

### その他気づいたこといろいろ

「ISBN が 10 桁と 13 桁が併記されている。13 桁化以降の出版物には、10 桁の ISBN は正式には存在しないはず。検索等のシステムの都合で、接頭 3 桁を除いたものを 10 桁としていると思われる。正式なコードではないので表に出すべきではない。」(千葉県立)  
試しにみってみると、

書名	:	アイドル進化論
書名ヨミ	:	アイドル シンカロン
副書名	:	南沙織から初音ミク、AKB48まで (中略)
ISBN(10 桁)	:	4-480-86408-6
ISBN(13 桁)	:	978-4-480-86408-6

確かに、これは誤解を招きますね。ISBN-10 と ISBN-13 では check digit の計算方式が違うので、先頭の 978 (979) を除いただけでは ISBN-10 にはなりません。この場合正しくは 4-480-86408-3 になります。

ちなみに CD の計算方法は、

ISBD-10: ウェイトとして 10 から 2 までを用いるモジュラス 11 (①検査数字以外の 9 桁の数字を、1 桁の数字が 9 個並んでいるものと考え、それぞれに 10 から 2 までを順次掛けていき、それらを合計する。②その値に 0~10 までの整数のうちのどれを足したら 11 の倍数になるか、と考えたとき、その足すべき数が CD である。ただし足すべき数が 10 の時はローマ数字の X を使う。)

ISBN-13: ウェイトとして 1・3 を用いるモジュラス 10 (検査数字以外の 12 桁の数字を、1 桁の数字が 12 個並んでいるものと考え、それぞれに 1 と 3 を交互に掛けていき<sup>1</sup>、それらを合計する。この合計に 0~9 までの整数を加えて 10 の倍数にするとき、その加えるべき数が CD である。)

---

<sup>1</sup>厳密には、「検査数字を含む各桁に、右から 1,3,1,3…を掛ける。ただし検査数字がないときは仮に 0 が入っているものとして計算する」となっている。結果的には「12 桁に左から 1,3,1,3…」と同じ。

## 検索対象

図書と逐次刊行物は厳密に区別しがたい面もあるので統合で良いだろうが、AV や地域資料などは、デフォルトからは外す（必要なときにチェックを入れる）ほうがよいのでは。

国会の新しい OPAC のように雑誌記事索引まで含めてデフォルトでは全選択になっているのはどうみてもいただけない。All in one でたくさん漏れなく出て来て良かったと思っている利用者よりは、ノイズの山に埋もれて困っている人の方が多いのでは。

たぶんそういうことをいうと「それはまだ OPAC といったら在庫管理、という発想から抜け切れていない証拠。これからは情報の宇宙へのポータルに脱皮して云々」などと言われるのだろうが、図書を探したいときと雑誌記事を探したいときとでは心の持ちようが違う。両方ほしいときは自分でチェックするから、余計なお世話はしてくれなくていいよという感じ。

## 書誌階層

巨大なセットものが物理単位で表示され、「次画面へ」を 10 回も 20 回も押さないとお目当ての本にたどり着けなかったり。特に館内 OPAC は 1 画面の表示数に制約があるのでなおさら。

「シリーズ」で書誌、「それを構成する各巻」のそれぞれにも書誌、両者の中で相互にリンク、とできればそれだけでもかなり楽（NACSIS-cat とか）

「展開」「折りたたみ」のほうが分かりやすいかも。

## 検索範囲

検索項目によくある「キーワード」とはどのような検索をいうのか？

いろいろなフィールドにまたがって探してくれるらしいことは分かるが…

そもそも利用者はどう理解しているだろうか。

「タイトル」には内容細目やシリーズ名も含むのか？（利用者的には含んで欲しい）

「責任表示」も同様。

## 検索の基本機能について

遡及変換…公共図書館では一気に OPAC 化

大学・国会は少しずつ

## 検索速度

昔はヒット数の多い語を入れると数分間待たされたりした（索引ファイルが作られておらず逐次探索していた？）。今でも件数が多いと遅くなる場所もあるが、「件数+最初の 10 件（25 件）」とかならずぐに出ないか。google など 1 億件ヒットしても最初の 10 件ぐ

らいはすぐに出る。

### ブール演算, トランケーション

ヒット数が多かったとき, 絞り込みで not が使えると良い

基本は、(A or B or …) and (X or Y or …)ではないか

例) 地震の際のストレス

まず、「地震」「ストレス」の AND を想起

それぞれに、OR のバリエーション（「震災」や「PTSD」）を

これができないと、有効性は減衰

中途半端に枠を設けるよりは、演算子入力でよいかも

(この項一昨年のレジюмеより)

もし枠を設けるとしたら,

地震 震災	いずれかを含む▼	and▼
ストレス PTSD	いずれかを含む▼	

のようになるのだろうが, 確かに検索式をじかに書いてしまった方が楽で分かりやすいかも知れない。

まともらなくなってきたので, ここからは一昨年のレジюмеを借ります。渡邊先生すみません。でもまとめようとするので似てきてしまうのです。来年は自分の言葉で書きますので。

#### ●少し高度な検索機能

典拠コントロール

- 例: 90 年代の岩波「漱石全集」(奥付の表示が「夏目金之助」)  
→ 「夏目漱石」で検索できないシステムも
- システムよりも MARC データに起因

内容情報の増強

- 内容細目、内容紹介、帯情報、著者紹介等  
急速に広まっている(大学図書館と比べても)  
→ 表示のみで検索対象としないケースも(もったいない)

主題検索のサポート

- 同義語辞書

辞書の信頼性が鍵 → 多くは企業秘密でブラックボックス  
更新できるべき(地域特有の語など)

•分類表の利用

広まっているが、十分使えるものになっているかは疑問  
視覚的アクセス、分類表の名辞と索引語…  
件名標目表の利用は未踏

●表示機能とナビゲーション

一覧表示とソート

•一覧表示に求められるもの

既知資料の検索

それほど重要ではない(それほどヒット件数は多くないはず)

未知資料の検索

一覧表示から目指す資料を選択する必要

→ ある程度の情報量と一覧性がともに必要

•一覧表示の限られたスペースに何を出すのか

表形式か連結式か

「最初の著者だけ」仕様がけっこうある → 「ほか」と出したほうが…

タイトル関連情報、シリーズ名をどうするか

出版年を出さないシステムも見受けられる

入手可能性(在架かどうか)もある程度わかるとよい

•ソート機能は案外充実(大学図書館よりも?)

検索画面での選択でもよいが、一覧表示段階で切り替えられるのが望ましい

検索エンジンのような「ランキング表示」の可能性

大規模蔵書の場合、内容情報が充実してきた場合

•一覧表示の一画面出力件数

相当の件数を一覧していくことが(絞り込み検索より)有効な場合も

→ 初期設定は10~20件でも、100件程度までは拡張できるとよい

検索画面での選択でもよいが、一覧表示段階で切り替えられるのが望ましい

•入力された検索語

一覧画面で表示すべき(誤りなどもわかる): 対応システムはむしろ少ない

検索画面に戻ると入力キーワードが消えるものも珍しくない

•絞り込み検索

一覧画面でできるとよい

できなくとも、入力状態を保持した検索画面へ戻れるように

## 書誌情報の詳細表示

- 必要最小限の項目 vs. 全部出す

絞り込みすぎの感のあるシステムも

ブラックボックス(なぜヒットしたのかわからない)→ 無用の不安感

検索対象とするなら、詳細表示に出すべき

- ハイライト表示

広まっていないが、有用性は非常に大きい

(特に、内容紹介など検索対象項目が拡張された場合)

インターネット検索エンジンと対比して

## ナビゲーションのための配慮

- 画面の統一性

- そこに至る経緯を表示すべき

何で検索してそこへ到達したのか

- 検索履歴の再利用(どれだけ有効性があるか)

- ハイパーリンクの有効活用

著者や件名をクリックすると当該の一覧表示に

ある程度広まってきた

典拠コントロールとの関係

著者名典拠がどこまで管理されているか: 逆効果の場合も

## 雑誌検索のナビゲーション

- 大学図書館ではほぼ統一: 『学術雑誌総合目録』の伝統

検索→ 書誌情報(雑誌タイトル単位)→ 包括所蔵(例: 1-3,6-13+ )

→ 物理単位(新着巻号、製本情報)

- 公共図書館ではまちまち

いきなり物理単位でなく、雑誌タイトル単位を介すべきでは?

(物品としての管理に傾斜しすぎ)

## ●ヘルプ機能など

ちゃんと書くべき

「ヘルプなしで使えるシステムが理想」「そんなに読んでくれない」は正しいが…

それでもきちんと書くのが提供者の責任

カスタマイズしたのにヘルプはもとのまま…(論外)



絶対に、司書が書くべき

メーカーに「わかりやすいヘルプ」を要求しても無理

随時書き換えられる仕様を要求

新しいシステムに対して、動く前に完璧なヘルプは書けない

用語の使いかた・説明のしかた

本当に難しい…

多少長くなっても、例示を入れるべきでは

ヘルプの単位

ピンポイントで示せ、かつ通読もできるのが望ましい

画面上の言葉づかい

細かい言葉も意外に大事

「著者」「キーワード」…（明快な解は難しいことも多い）

ヘルプを自分で書いてみると、問題点がわかるのでは

●「次世代 OPAC」？

「資料組織法の現在」のレジюмеに

「次世代」も重要だが、今の OPAC への注意も…

ベンダ任せでなく、専門職としての当事者意識を持って大小の問題に目を配る姿勢をとらないと、同じことの繰り返しでは